

世界へ向けた商業高校の取組

— 徳島商業が取り組む GLOCAL 人材の育成 —

徳島県立徳島商業高等学校教諭 鈴鹿 剛

1. はじめに

徳島商業高校は明治42年に創立し、今年創立109年を迎える徳島県の商業教育の中核校である。現在は、商業科・会計情報科・情報処理科の3学科で編成されている。

本校では、Glocal人材の育成に力を入れており、平成23年にはドイツ ニーダーザクセン州のシェーラベルク職業学校、平成25年にはカンボジア プレイベン州のカンボジア日本友好学園（以下友好学園とする。）とそれぞれ友好校協定を締結している。（GlocalとはGlobal+Localの造語であり、本校では平成24年より用いている。）

また、平成27年度には文部科学省からスーパープロフェッショナルハイスクール（以下SPHとする）研究校の指定を受け、活動の幅を広げてきた。

さらに、平成30年度からは経済産業省 未来の教室実証事業実施校として、PBLを活かした教育活動やSTEAMS教育の研究にも取り組み始めた。

2. 研究概要

本校が目指す、育成したいGlocal人材像とは、地域の魅力を地域から世界へ発信することができ、かつグローバルな感覚を持つプロデューサーの資質を持つ人材である。

また、SPHでは、事業タイトルを「DEEP IN TOKUSHIMA ～徳商版「地域創生」人材育成プロジェクト～」とし、「地域について深く知り、地域の魅力を創出し、世界に向けて発信できるプロデューサー・コーディネーター」を輩出するた



めの人材育成モデルの研究を行った。

これは「国際理解」はもちろんのこと「国際経済」「言語を超えた交流」を目指すものである。

3. 具体的な取組

ここでは、友好学園との取組を紹介する。

（1）取り組み始めたきっかけ

平成23年の東日本大震災支援活動をしているときに、カンボジアへ支援をしている方より、日本から支援を受けているカンボジアの学校が「支援が減るのではないかと心配している。連携した活動ができないか。」と声をかけられたことがきっかけである。



（2）平成24年から平成27年の実施内容

友好学園の問題点は「学校運営の資金不足」ということであった。そこで、共同で商品開発を行

い、その売上で学校運営を助けるという自立支援型プロジェクトを立ち上げた。

生徒の活動

- ・ JICA 四国協力の下、事業の整理
- ・ PCM（プロジェクトサイクルマネージメント）手法を用いての分析
- ・ テレビ会議を用いての発想法の伝達
- ・ 商品のアイデア出し、レシピ作成
- ・ 協力した商品試作
- ・ 国際展示会出展（マーケティング調査）
- ・ 商品名、パッケージの考案
- ・ ロゴマークの作成
- ・ 商標申請、国際商標申請
（日本・カンボジア・ベトナム国際商標取得）
- ・ 両国における販売実習
- ・ 原料を生産してくれる村の開拓
- ・ 実教出版「商品開発」教科書のクメール語化
翻訳のサポート



などを行った。その間、実施したテレビ会議は年間約 20 回、年 2 回のカンボジア訪問、年 1 回のカンボジアからの生徒、教員の受入を実施した。細かい話し合いをするテレビ会議においては、友好学園卒業生に通訳をお願いしたが、販売など通常の活動ではカンボジアの生徒は「日本語ノート」、日本の生徒は「カンボジアノート」を作成し、クメール語・英語・日本語の 3 言語で交流している。



（3）平成 28 年から 29 年度の主な活動

・工場建設に向けた準備活動～建設

商品開発活動が続ける中で、日本のように連携先企業を募り OEM で商品を仕上げるのが、カンボジアではほぼ不可能であることがわかった。そこで、工場建設を意識するようになり、生徒と共に計画を練った。



・提案型フェアトレードの開始

様々な郊外の村の生活実態を知り、村人たちの生活を向上させたいと考えた。そのため徳商生が用途開発を行い、工芸品などの設計図を作り製造依頼する形のフェアトレードを行うことにした。



・衛生指導型フェアトレードの開始

カンボジアの郊外の村では、衛生に対する意識が低いことがわかった。カンボジアの特産品である「やし砂糖」も埃や灰が入る環境で製造されていた。そこで、衛生的な製造方法を調べ、環境整

備と衛生的製造のポイントを指導することにした。

生徒の活動（工場）

- ・工場設計図の考案（建築士指導の下）
- ・工場模型の作製
- ・HACCPの学習（工場設計図の変更）
- ・GlobalGAPの学習（現地農家との連携）
- ・工場建設におけるSWOT分析
- ・各商品のQC（Quality Control）工程図作成
- ・工場商品の原価計算
- ・工場インターンシップ（12月予定）

S trength 強み ・村人を雇うことが出来る ・新たな産業と特産品が出来る ・安全な食品を市場に送れる ・学校内でインターンシップが可能になる	W eakness 弱み ・工場運営の経験が無い ・水道が届いていない ・流通インフラが届いていない ・衛生学習が出来ていない
O ppportunity 機会 ・食品加工工場が無い ・経済成長中である ・カンボジア産の1次加工された食品が少ない ・東京オリンピック	T hreat 脅威 ・海外からの輸入食材 ・カンボジアの情勢不安 ・インフラの設備が弱い

生徒の活動（フェアトレード）

- ・クロマーの用途開発
アイデア出し 設計図作成
テレビ会議による製造依頼
販売計画、マーケティング調査準備
（抱っこ紐・ティッシュケースなど）
- ・衛生的な砂糖加工の調査（沖縄県黒糖作り）
- ・砂糖の村で衛生的に製造するポイントの説明
- ・製造環境の確認



抱っこ紐

（４）現地訪問活動（平成29年カンボジア訪問）

平成29年12月カンボジア訪問

訪問者：生徒9名 引率教員2名

訪問地：カンボジア プノンペン・プレイベ

ン・シェムリアップ

日程：平成29年12月15日～26日

12月15日 徳島ープノンペンへの移動

（関空ーホーチミンープノンペン）

16日 プノンペン研修

16日～18日 カンボジア一州一品国際
展示会への参加（カンボジア最
大の見本市）

19日 やし砂糖の村 整備施設の視察
農家さんとのミーティング

クロマー（民芸品）の村 視察
新しいクロマー制作の打合せ

20日 人権学習（トゥールスレン、キリ
ングフィールド）ポルボトの歴史

21日 友好学園（食品加工工場落成式）
工場内覧会

22日 友好学園（食品加工工場実習）

23日 連携農場視察（コソルファーム）
GAP取得打合せ

24日 シェムリアップ市場調査
文化遺産学習（アンコールワット
など）観光学習

25日 文化遺産学習（プレアピヒアなど）

26日 帰国

主な活動

○カンボジア一州一品国際展示会への出展

4年連続の出展ということもあり、かなり知名度が上がってきている印象を受けた。共同開発商品である「ふれんじゅう（フレンドシップ饅頭）」「椰子砂糖アイス」「カシューナッツアイス」などを調査販売した。連日完売の盛況ぶりだった。

販売終了後の両国のミーティングで出た意見は言葉の壁はあっても、協力してそれを乗り越える



国際展示会への出展

ことができたということだ。片言のクメール語や日本語、英語、ジェスチャーなどを通して、コミュニケーションを取りながら全員で活動ができた。友好学園の生徒も成長しており、前回共同で販売した際に出た反省点は全て改善されていた。リーフレットやポスターもデザインのレベルは格段に上がっており、心強い仲間に成長していた。

○ソーシャルビジネスを目指した地方の村訪問

椰子砂糖の村は、これまで沖縄で学んだ黒糖の製造ノウハウを元にした施設の整備がほぼ整っていた。しかし、一部不完全な所もあり修正の依頼を行った。

クロマーの村では、生徒がデザインを考案し、製造委託をしていたものが完成し、これからも互いに意見を出し合いながら日本人向けの用途開発を行っていくことを確認した。



やし砂糖の村 MTG

○友好学園内食品加工場の落成式・製造実習

落成式にはカンボジア教育省長官をはじめ、ブレイベン州副知事、州警察署長など多くの方々に出席いただいた。式典の後には友好学園の商品開発チームのメンバーと本校生徒が、この工場で作ったアイスを友好学園の生徒に配布した。

「ふれんじゅう」や「椰子砂糖アイス」の製造実習を行うとともに、専門家より衛生に関する注意点を教えていただいた。さらに HACCP 対応の工場にしていけるためのポイントを確認した。

○GlobalGAP 取得に向けての連携農場視察

連携農場であるコソルファームを訪問した。農場主のコソル氏は友好学園の卒業生で、良質の農産物を消費者に届けたいという意識で農場運営を行っている。コソルファームからは食品加工場に農産物を供給してもらう予定である。



コソルファーム MTG

今回の訪問では、農場を視察し、GlobalGAP を取得するにはどうすればいいのか、何をしなければならぬのかを専門家からアドバイスをいただきながら、両国生徒と共に計画を立てた。

○観光ビジネスの学習

観光ビジネスの学習を行うためアンコールワット・アンコールトム・プレアビヒヤなど世界遺産を訪れ、「どういった観光客が多いのか」「どういった場所に人が集まっているか」などを調査した。また、ガイドの方の話し方や話の内容から、観光客がどのような話に興味を持つのかを考えるとともに、その職に就くプロがどのようなトークスキルを有しているのか、ということ考えた。



観光ビジネス学習

●生徒感想

生徒 A：行く前と帰って来てからでは私自身の気持ちが大きく変化していることに気づきました。部室で鑑賞したカンボジアの映画では「大変なんだ」「凄い取組だな」と他人事だった思いが、実際にカンボジアへ行き、現状を見ると「私たちができることをしよう」と自分事として考えることができるようになりました。カンボジアでの経験はとても良いものとなり、これからの私の考え方を大きく変えてくれるきっかけとなりました。また、国境を越えた新たな仲間も増えて大変嬉しく感じています。

生徒B：今回初めて、カンボジアを訪問し、テレビ会議で話していたカンボジアの生徒たちと実際に会うことができました。最初はぎこちない日本語と英語で話していましたが、一緒に話をしたり、販売をしたりすることで、日数を重ねるごとに何となく意味が分かるようになり積極的に話しかけることができました。その国のこと、習慣や流行っている遊びなど色々なことを教えてくれて、本などで調べるよりも身近な情報を手に入れることができ、馴染みやすかったです。価値観の違いや物価の違い、好きな味や流行りのものなどを知ることができてとてもいい時間でした。そして食品加工場は、私たちが作った模型そのままにでき上がっておりとても感動を覚えました。模型で見ていた場所を実際に歩き、専門家の方の説明を聞き、この加工場の部屋の配置がどのように工夫されているか、どこが重要なポイントなのかを聞き、これまで以上に理解が進みました。

(5) 学校全体での活動へ

カンボジア活動の中心はビジネス研究部が中心となっていたが、SPH 研究指定を受け全校的な取組となるよう工夫を行っている（本校では、ビジネス研究部が取り組んだ先端的な商業活動の中で実践的商業教育に活かせるものは授業に展開している）。

① 課題研究、商品開発授業における交流

本校が実施している「徳商デパート」でのカンボジア生徒との共同出店を目標に、テレビ会議などで打ち合わせを重ね、当日は両国生徒が一つのブースを作り上げた。



② 地域創生委員の創設

一部の生徒が中心に取り組んでいる地域の課題

への取組を全校生徒に広げるため、生徒会組織の一つとして、「地域創生委員」を平成29年4月創設した。全クラスから委員を選出し、60名で構成されている。委員は「情報」「国際」「観光」「商品開発」の4つのグループに分かれ、それぞれが、地域課題に対し取組を始めた。

4. 研究の成果と課題

本校ではこの1年間で、生徒のカンボジア訪問2回とカンボジアからの受入1回を実施した。これまでのカンボジアとの交流の積み重ねもあり、JENESYSによるカンボジア訪問団の受入（カンボジア人26名）やカンボジア教育省視察団の受入、さらにはJICA研修員（アフリカ各国25名）に対する観光ツアーの実施など、生徒たちにとって多くの海外の方々との交流を行う機会に恵まれた。その中で、挨拶など簡単な言葉ではあるが、クメール語で自己紹介できる生徒が増えてきている。

カンボジアに訪問した生徒たちは、言語を学ぶことの重要性を認識し、言語ノートを作っていた（徳商生はクメール語ノート、友好学園の生徒は日本語ノート）。カンボジアの生徒たちは、本校との交流により日本語に対する意識が向上しているようで、年々レベルアップしている。具体的には、カンボジアにおける日本語スピーチコンテスト上位入賞、王立プノンペン大学日本語学科への3名の進学などである。本校の生徒たちは外国語があまり得意でなく、言葉ではなかなか気持ちを伝えることができていないように見えたが、ジェスチャーなど非言語による意思疎通を積極的に図り、チームとして通訳がいなくても成立していた。

カンボジアにおけるマーケティング調査や国際展示会では、日本人以外の人と多く関わることで考え方の違いや感じ方の違いを肌で感じ、互いの考えを認め合うことを学んだ。また、両校の生徒が一緒にイベントに取り組むことで、互いに切磋琢磨し、大きく成長していると感じられた。

Glocal プロデューサー育成の課題は、どれだけ多くの生徒が、国際感覚を身につけることができ

る機会を設けることができるかである。実際に、海外を訪問した生徒、カンボジアやドイツの生徒が来校したときに対応にあたった生徒については、大きな意識の変化が見られた。年々工夫しながら、多くの生徒が関わる環境作りを行っているが、効果を大きくするためにはさらなる工夫が重要である。



5. 外部機関の活用

徳島商業高校が、生徒と共にダイナミックな活動ができている大きな要素として、外部機関との連携が挙げられる。地元活性化関連に関しては、商工会議所や中小企業団体中央会、同友会などの経済団体をはじめ、地元大学、商店街などと多くの連携をしている。さらに、今回のような海外案件に関しては、JICA の協力が欠かせないものであった。現在、徳島商業高校が取り組んでいる草の根技術協力事業は、生徒に対する費用としては活用できないものの、現地の先生方の研修やインフラの整備には、かなり有効であった。以下に、学校の教員が活用できそうなプログラムを紹介する。

① 国際協力出前講座

<https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/delivery/index.html>

② 教師海外研修

<https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/teacher/index.html>

③ 先生向けお役立ちサイト

(教材の紹介や、10分映像)

<https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/index.html>

(冊子、貸出)

<https://www.jica.go.jp/hiroba/program/>

[practice/education/index.html](https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/index.html)

④ 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

<https://www.jica.go.jp/hiroba/program/apply/essay/index.html>

⑤ JICA ボランティア現職教員特別参加制度

<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/teacher/>

(なおリンクは全て JICA 本部（地球ひろば、協力隊事務局）のもの)

6. まとめ（おわりに）

これまで、Glocal 人材を育成するために意識したことは、「課題発見能力と課題解決能力の育成」、「発想力・想像力と認知開発力（物事の中に新しい関係性を見出し、価値化する力）の育成」である。生徒が自ら、学び、考え、解決する機会を多く作ることが成長を育んでいるように感じる。例えば、カンボジアの生徒からテレビ会議において「この商品はどうしたら売れるようになりますか?」と聞かれたとき、生徒たちは授業での「先生から面倒を見てもらう人」から「面倒を見る先輩」に変化していった。

また地域の企業の方々と話をしていると、多くの企業が程度の差はあるものの、海外との取引を行っているという話を聞く。産業界に人材を輩出する商業高校としては Glocal 人材の育成は、重要な課題である。

平成 30 年 5 月徳島商業高校は、高等学校としてはじめて消費者支援功労者表彰の第一席となる内閣総理大臣賞を受賞した。これまで、カンボジアの人々と作り上げてきたフェアトレードの活動などが認められたからである。この表彰を励みとし、これからも生徒たちが「ワクワクする課題解決型学習」を生徒と共に創造し、「心で通じる」「他の人の考えを理解し尊重する」人材を育成していきたい。